

## 貴人星と自刑



いっぱいに入る朝日に当たって、夫と新聞を  
読んでいると、香川に嫁に行っている長女から  
電話があった。

「ね、おとこいまた追突されちゃった」

信号が赤になり停止した所だったと言つ。初  
老の男性は娘が通り抜けると思ったらしいが、  
娘はルールには忠実だ。

彼女は六年前、瀕死の事故に会っていた。夜  
剣道塾の次男を迎えに行つた帰りの田舎道に  
十代の娘の猛スピードで運転する対抗車が飛び  
込んで来たのだ。流水を浴びているような激し  
い夕立の中でのことだった。

「朝までもつかどうか」

夜中に医大の病院から姑の電話があつて、私  
は朝一番の大阪經由で高松に向かったのだが、  
頭の中はすっかり真っ白だった。

酸素を被つた娘の目の周りは黒ずんでいたが、  
辛い折れた胸骨が肺に刺さらずに済んだことと、  
若い生命力で一命は取りとめた。

今回は手は痺れているものの命に別状はない  
という。

「あんな運転のママが一度も事故に会わないの  
に、何で私がこんな目に会つのかなあ」

運転には自信のある娘の声は不満そうだ。は  
たから見ると私の運転は余程信用がないらしいが、  
不思議と自分で事故は一度も起こしたことがな  
い。

「お前には貴人星がずらずら付いていて護つて  
くれているんだ。男の子たちは付いているが、

久子も洋子も付いていない」

と四柱推命学に詳しい夫が言った。

夫は小学校卒業前の紀元節（二月十一日）の朝、猛烈な胸痛に襲われたという。急性の肋膜炎だった。式の後に卒業写真を撮る予定だったそうだ。終戦の前年の京城での事だ。続いて腹膜炎を併発した夫は主治医にも見放され、医者だった父が必死に漢方に頼って

看病しそのおかげで起死回生したのだという。

病後の二年間ほどを読書と釣りで過ごした夫は、卒業アルバムにもない自分に、どうしようもない脱落感から、運命を思い、易学に凝ったという。

私は別に運命論者ではないが、何かの時に納得させられるので、そんなものかなあと思っている。天性に守護神がいて下さるなんて本当に有り難いことだ。

ただいいことばかりではなく、私には自刑という星もあるとも言われて来た。それがどういう定義なのか。漢和字典で調べると、刑という字は囲いの井に刀で、杵に押し込めて刀で体刑を加えたことから作られたとある。自刑とは自分で自分を傷つけるということなのだろうか。夫に確かめると

「自刑もいろいろあるが、お前の自刑は俊敏で強い。何事も過ぎたるは及ばざる如しで、強さが災いすることにもなる。お前は生まれ日が良いから、それが貴人星に変わって、護ってくれている。しかしそのことをよく自覚自戒して行動しなければならぬ」と言う。

私は口喧嘩などには弱い。デイベートなど全然出来ない。しかし納得しなければ降参はしないし、自分が思ったことは貫徹する根気と粘り

強さはあると思う。そついう意味でなら強いのかも知れない。

病弱で長女だつた私は、父母、祖父母の愛情を一身に受けて育つた。多分我が儘一杯だつたことだろう。善意で押し通しても、自分では気が付かない我が儘さもあるだろう。夫の言つようにならぬと思つた。夫の言つようにならぬと思つた。

この十一月私も六十八歳になつた。嫁からの花キューピットを受け取つて幸せ気分になつたところに娘の電話だつた。ともあれ娘の命に別状なかつたことは謝すべきだろう。

不吉な幕開けの年となつた二十一年も暮れる。自刑には自戒。他山の石は大いに学び、もっと他を思いやる心のゆとりを持って、午後三時の人生を精一杯生きよう。そして明るい未来を信じ、前向きに生きたいと思つた。